快楽と平和の追求 —— ウィリアム・フォークナーの『寓話』における不定形な働き

藤　野　功　一

はじめに

ウィリアム・フォークナーの 1954 年の長編小説『寓話』(*A Fable*)[1] は 1917 年に実際に起こったフランス軍の軍隊の反乱を 1918 年の春に時間を移し[2]、第一次世界大戦中の 1918 年 5 月下旬、仏英米連合軍と独軍が交戦する西部戦線で、両軍の兵士が一時的に戦闘を放棄するという奇妙な出来事を描いた作品である。その顛末は次のように語られる。フランス軍の一連隊が、何らかの理由でドイツ軍が占領している丘を攻撃するように命令される。この命令を受けたフランス連隊の隊長は、長年の経験からこの作戦が明らかに失敗するだろうと予測はするものの、命令には逆えず、ドイツ軍に攻撃を開始しようとする。しかし、その攻撃は実行されなかった。突然、彼の指揮するフランス軍連隊が攻撃をやめてしまい、その一方で、フランスが攻撃をしてこないことを認識したはずのドイツ軍も、同様に攻撃をやめてしまったのである。調べてみると、このフランス軍兵士たちの突然の攻撃中止はステファン(Stefan)という名前の伍長とそれに率いられた 12 人の兵士によってそそのかされたらしいことがわかる。周囲の兵士達に武器を捨てて戦いを放棄するように伝えていたのだ。フランス軍司令官は戦闘放棄をそそのかした連隊の 13 人を拘束し、首謀者らしき伍長を独房に入れる。伍長は老将軍と呼ばれるフランス軍最高司令官の前に連れてこられる。この伍長は老いた将軍の私生児であり、そのため伍長を失いたくはない老将軍は伍長を説得するが、頑なに戦闘を今すぐに終わらせたいと願う伍長は老将軍に従うことなく、やむなく老将軍は自分の息子を銃殺刑に処するよう命ずる。フォークナーはこの出来事をキリスト受難の七日間になぞらえつ

つ、1 週間のあいだの時間を前後させながら、伍長とこの出来事に関わった人々の運命を描き出している。

『寓話』は、初期の頃においては、マルカム・カウリー(Malcolm Cowley)が 1954 年の書評で述べたように、この作品は小説であると同時にキリストの受難劇の再演であると解釈されてきた。カウリーはこの小説を絶賛して、フォークナーはここではそれまで自分がもっぱら小説の舞台としていた架空のアメリカの土地であるミシシッピー州のヨクナパトーファ郡から離れ、「小説でありまた黄金のようにきらめく伝説であり、そして同時にキリスト受難の物語でもある」作品を書いたのであり、「第一次世界大戦中、1918 年五月下旬の西部前線にて、(第一次世界大戦の)フランス軍の伍長が世界を悪から救う決意をしたという物語を通して、キリストの受難が再演された作品」[3] であると述べている。また、同年の書評ではスターリン・ノース(Sterling North)も、この小説をキリストの受難の 7 日間が 1918 年の春の出来事として再演された作品[4] として解釈した。

初期のフォークナー研究者もこの解釈を踏襲している。1961 年のフレデリック・J・ホフマン(Frederick J. Hoffman)は、この小説に登場する主人公の伍長は戦争中にもかかわらず武器を捨て、戦闘放棄をしようとするが、そのような戦闘放棄は戦場では反乱と考えられるとした上で、「反乱を指揮する文盲の伍長はキリストの似姿であり、彼に付き従う 12 人の兵士はキリストの 12 使徒である。そのうちの部下の一人が新約聖書のキリストの受難の物語と同じくキリストを裏切り、また別の部下は伍長のことを知らないと三度言う。さらに、キリストがサタンに誘惑されたのと同じように、伍長は同盟国の最高司令官にそそのかされる。また、伍長は銃殺隊によって銃殺されて倒れるときに、その頭が有刺鉄線に引っかかってしまうが、それは、十字架につけられたキリストの頭部に巻かれたイバラの冠の現代版だ」[5] と解釈した。また、1965 年にはマイケル・ミルゲイト(Michael Milgate)もフォークナー自身のコメントを引用しながら、この作品は「キリスト教的なアレゴリーを利用して描かれた作品」[6] であり、その寓意がこの小説の中心的意味をなすものとして解釈している。

しかし、このように初期の評者や研究者がこの小説をキリスト受難の物語の再話として読んだからと言って、現代の読者がいまでも同じようにこの小説を

非歴史的な寓話的作品として読む義務はないだろう。多くの兵士達に戦争を放棄させると言う反乱をけしかける伍長に従う部下の兵士の人数がキリストの弟子の数と同じ 12 人であり、また、伍長が罪人として捕らえられたのち、キリストと同じように処刑されるからといって、この小説を単純にキリスト受難の再話として読んでしまうと、この小説の歴史的な意味がよく理解できなくなってしまい、結局『寓話』はその創作力に陰りが見え始めたノーベル賞作家が出版した、いささか時代錯誤的なキリスト教的寓話を語った力技の小説だ、という評価にならざるを得なくなってしまう。

最近ではさすがにそのようなキリスト教的解釈からは離れた読みが行われており、たとえば 2009 年にジョン・T・マシュー（John T. Matthews）は『ウィリアム・フォークナー論』（*William Faulkner: Seeing through the South*）において、この小説においては「フォークナーは民衆が何を成し遂げられるのかについて興味があるのだ。単純な人々の群れがもはや戦争するのをやめることを通して、権威に抵抗する。...それは民主的革命にもつながりうる労働者階級からみた世界の描写であり、この小説で、連合軍と枢軸国の司令官達が殺戮を再度開始しようとたくらむ様子を描きつつ、フォークナーは、第一次世界大戦は［1930 年代に］差し迫りつつあった世界全体にわたる労働者による革命をつぶそうと財界及び産業界のブルジョアジーが画策したものであるという、その当時よく行われていた第一次世界大戦についてのうがった見方を意識していたに違いない。」[7] と述べて、この小説は大衆に民主的革命の可能性を見ようとしているのだと論じた。さらに 2019 年のジェイ・ワトソンはマシューの解釈をさらに発展させて、反乱する兵士たちや戦争の最中に描き出される大衆の姿に「相互に関わり合う生の持続性のなかの古くて新しい集合体」[8] をみる批評が出てきている。現代の読者には、マシューやワトソンの解釈のほうがしっくりくるが、そうは言ってもマシューもワトソンも、彼らの言っている「民主的革命にもつながりうる労働者階級からみた世界」とはどのようなものか、あるいは、古くて新しい「相互に関わり合う生の持続性」が具体的にどのように古くて新しく、どのように関わり合うのかについては、あまり具体的には論じていない。

ここでは、マシューとワトソンの解釈をさらに発展させながら、第一次世界

大戦から『寓話』出版の1954年までの時代背景も俯瞰して、フォークナーが1954年に第一次世界大戦を題材とした作品を発表した意義とともに、現代において『寓話』がどう解釈すべきかを考え、キリスト教的な解釈によって作品を非歴史化することなく、むしろ『寓話』を我々の現実の歴史とも連続したものするとき、どのような読み方が可能かを探ってみたい。

1．フォークナーの『寓話』と歴史的背景

フォークナーの作品を歴史化して読むためにも、まず、フォークナーの生涯全体を、アメリカの歴史的発展の中で見たとき、どのように位置付けられるかについてまず考えてみよう。フォークナーの作品において重要な戦争は、しばしば南北戦争と第一次世界大戦と第二次世界大戦だと言われるが、フォークナーが生きた時代に起こった戦争に限定して考えるなら、重要な戦争は、米西戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦である。19世紀半ばの内戦である南北戦争とは対照的に、これらの３つの戦争は現代的な国際戦争であり、これら３つの国際戦争を通じて、アメリカがどのような特徴を持った軍事組織を作り出したかを考えることは、『寓話』の解釈にも有用だろう。ここでアメリカの軍事組織の特徴を考えるにあたって、アメリカの戦争における動員の歴史を全５巻にまとめたコイスティネンの著作の第２巻『近代戦における動員：アメリカ近代戦争での政治経済の一体化1865年-1919年』(*Mibilizing for Modern War: The Political Economy of American Warfare, 1865-1919*)の記述の中で、米西戦争から第一次世界大戦、さらに第二次世界大戦へと発展してゆく過程で、アメリカの軍隊は諜報機関と軍産複合体の体制を発展させていったが、これらの体制はその初期においてごく小さく局所的な「不定形な働き」(amorphous agency)[9]からはじまったと述べられていることに注目してみたい。

コイスティネンが実際に「不定形な働き」(amorphous agency)という用語を使っているのは、アメリカ陸軍の軍事諜報機関の始まりを述べる部分である。フォークナーが生まれた1897年から２年後の1898年に米西戦争が行われたが、この戦争が起こる12年前の1885年にこの米西戦争でのアメリカの勝利にも重要な貢献をすることになる重要な決定がなされた。1885年、陸軍長官が

R・C・ドラム副将に、外国の所有する陸軍の軍備情報をすぐに知らせてほしいと要請したところ、副将はそのような情報は持っていないと答え、その情報を得るのにしばらく時間が欲しいとの返事をした。[10] 意外なことだが、1775 年 7 月 14 日に創設されて以来、1885 年に至るまで、アメリカ陸軍には軍事諜報機関がなかったのである。そこでこのような不面目な対応を二度としないようにするため、ドラム副将は早速自らの部隊のなかに一つの部門を立ち上げ、その部門において自国及び外国の陸軍の情報を収集する部署を立ち上げた。そして、自国の軍備状況や他国の軍備状況を直ちに知りうる [11] 体制が必要であるとの認識から、翌年の 1886 年には軍事情報部(the Division of Military Information)と呼ばれることになる部局を作った。この部局が、その後 10 年の間に順調に発展し、やっと 1889 年 4 月 12 日に、正式に軍事諜報部（MID：the Military Information Division）と呼ばれる部局となる。ただし、その諜報部局の中身というのはどういうのをするかというと、軍の司令官に、将校や士官が刈谷釣りの旅行に行ったり、国境沿いの斥候に行く機会があれば、その国の資源やそこに隣接する国の様子などを見て、輸送経路などの様子を観察して報告するように依頼する程度のものであった。アメリカ陸軍はのちに 1917 年 5 月にやっと正式にこの軍事情報部門を Military Intelligence Division（軍事情報局）として独立させたが、米西戦争までは、非常に位置付けも曖昧な部局であり、重要性も認識されていなかったことがわかる。例えばそれは予算にも表れており、1894 年になってもまだ予算不足に苦しんでいる。[12]

しかし、米西戦争では、このように 1892 年までは「比較的小さく、不定形な働き」(the rather small and amorphous agency)だった軍事諜報部門が有効な働きをすることになる。米西戦争ではスペイン政府の公式発表では 13 万人の人員がキューバに送られたとの報告がなされたが、アメリカ側が情報をもとに計算してみると、実際の人員はどうやら 2000 人程度だということが明らかになった。いわば初期の曖昧ではっきりとしたマニュアルも確立されないままに行われた [13] 諜報活動によって、アメリカ当局は 1897 年の時点でスペインの戦争準備状況がどれくらいのものかが把握できたのである。米西戦争は短期間のうちにアメリカの勝利が確定した戦争であったが、その裏にはこのような、未発達で

はあるものの全方位的な活動を行う組織が有効に機能していたという事情があったようだ。

コイスティネンの見方によると、戦争動員体制に即応できるような体制を作るにあたって、必ずしも上意下達の行き届いた組織を作るのではなく、むしろ状況に応じて柔軟に変化することができるような組織を作るという状況は、海軍と軍事関係の産業との関係[14]においても見られた。海軍の必要とする産業形態はその部局や地域によってまちまちで、その場その場での必要に応じたものを産業側は作らなければならない。このような多方面にわたる多様な方面で必要に応じた生産体制を整えておくということは、戦時にはそれに即応した供給体制が取れるということでもあり、軍事と産業のつながりが多様で不定形なものであることは長所であった。これはつまり、米西戦争から第一次世界大戦にかけて、アメリカの軍隊では、海軍においても陸軍においても、たとえそれがあやふやで不定形な働きであったとしても、常に相手に対して不快な経験を与える体制を取っておく状況を作っておくことが大変有効だということを学んだということだろう。米西戦争から第一次世界大戦までの未発達な組織的体制の中で、アメリカは国家レベルの軍事組織の形成において、「比較的小さく、不定形な働き」(the rather small and amorphous agency)の有効性を実感したと言うことになる。

このような経験は軍需産業部門においても経験される。のちの第二次世界大戦時には巨大な組織となる軍産複合体についても、その起源となるのは第一次世界大戦の 1917 年に生まれた萌芽的な軍需産業委員会 (War Industry Board) であり、その最初の組織は極めて不定形なものであった。第一次世界大戦ではこの軍需産業委員会はやはり部分的にしか作用せず、また、不確かで荒削りな組織であったが、この多方面にわたる動員制度は最終的には戦況を左右するまでの重要性を増していく。そしてこの体制は、のちにアイゼンハワーが 1961 年の退任演説で、大統領でさえ制御できないほどの巨大な組織となったと警鐘を鳴らすことになった、アメリカの軍産複合体(Military-Industrial Complex)へと発展していく。なお、この過程の中で、大学を含むアカデミックな教育もまた軍産複合体に取り込まれてゆき、いわば学問と産業と軍隊による「鉄のトライ

アングル」が形成され、そこで対戦中にノバート・ウィナーがサイバネティクスの発想へと至る研究をすることになる（なお、第二次世界大戦後、著名な科学者となったノバート・ウィナーは科学技術の発展がミサイルなどの軍事転用になされることを危惧し、科学技術の軍事転用を行わせない倫理的感覚を模索し始めることになるが、これについては、第三章で詳しく述べることにしたい）。

ここでは、近現代の戦争においては、軍隊では必ずしも合理的で組織だった命令系統を持つ運用が必ずしもなされていたわけではなく、むしろ不定形な働きともいうべき、明確に制度化されず、組織名もあやふやな働きが思いがけず大きな働きをすることが頻繁にあったということをまずは押さえておこう。

第二次世界大戦後の文民統制のもとでのアメリカの軍隊組織に慣れ親しんだ私たちは、しばしば軍隊組織を国の組織の一環として考えがちだ。軍隊は命令系統がはっきりして、明確な目的を持ち、理性的で合理的な作戦のもとに軍事行動を行うと考えている。そのため不定形な働きというのは、軍事組織の形成と発展において非常に似つかわしくない言葉であると感じるが、コイスティネンは彼の著作で「不定形な」(amorphous)という言葉を4回つかい、一度ははっきりと“amorphous agency”という言葉を使って、米西戦争から第一次世界大戦にいたる軍事行動の中で、どのように「不定形な働き」(amorphous agency)が生まれ、発展したのかを記述した。コイスティネンは、ことに、軍事諜報部、および軍需産業の発展におけるそれぞれの組織においては、その最初の段階における不定形な働きの状態と、その結果もたらされる多方面への活動が、その後のそれらの組織の影響力の大きさを決定づけるのに重要な役割を担っていたと考えているようだ。

このような現実における戦争形態の発展を背景にしてみると、20世紀における軍隊の発展は必ずしも国家の統制のもとでの系統だった発展をしてきたのではなく、むしろ多方面にわたる領域へ無遠慮に侵食し、さらにはそれまでの国家機構から離脱し，あるいは旧来の秩序を破壊するような発展をしてきたのではないかという現実に目を向けることができる。哲学思想の領域では、このような現実を示唆する概念としてドゥルーズとガタリが『千のプラトー』のなかで「ノマド」という概念を示している。彼らのいう「ノマド」と言う概念は大

変わかりにくいものだが、おそらくこの概念によってドゥルーズとガタリが言いたかったのは、アメリカその他の覇権国家は、近現代戦争において新たで効果的な軍事組織を作る際に、国家機構(state apparatus)の従来の序列やそれぞれの組織の区分などに捉われない、得体の知れない組織を作っている、その現実を指してそれを「ノマド」だと言っているのだと考えるとわかりやすいかもしれない。「ノマド主義(Nomadism)というのは戦争機械で、それは国家組織とは相入れないものだ」(Nomadism is a war machine that opposes the State apparatus.)[15]とゴウナリが言っているように、ドゥルーズとガタリの「ノマド」と言う概念は「戦争機械」と密接な関係がある。ドゥルーズとガタリも『千のプラトー』のなかで「戦争機械」とは「純粋で無限の多様性」(a pure and immeasurable multiplicity)だと言っているが、これらの概念によって、ドゥルーズとガタリは近現代における軍隊組織の発展と戦争の実態を記述しようとしているのだと考えてみてよいかもしれない。近現代の軍隊の組織生成はその現場における軍事行動においては純粋で無限の多様性をもつ本性をあらわにするのであって、それは不定形な働きであり、明確な法律と組織をもって運営されている国家組織とは相容れない、そういう戦争機械が世界中で跋扈しているとドゥルーズとガタリは論じている。

このようなポストモダンの流れの中で出てきたノマド的な要素、あるいは不定形な働きともいうべき要素は、現在の主体形成にもおおきくかかわってきており、たとえば現代教育における主体形成を論じる時に、この「不定形な働き」(amorphous agency)という概念が使われることがある。リサ・ダウニングとロバート・ギレットの編集による『ヨーロッパのクイア』(*Queer in Europe*)という教育論集のなかでは、ことに生徒達の性的多様性をどのように捉えるかについて「不定形な働き」(amorphous agency)という概念が用いられており[16]、教育の分野で性的な主体をどのように認識したり、あるいは教育制度の中で管理すれば良いかを問題にするとき、ポストモダン的に(つまりドゥルーズとガタリが考えるような形で)、生徒達の性的な主体を、男性、女性、ホモセクシュアル、レズビアン、ノンセクシャルなどと無限に認めていってしまって、いわばその性的な主体の「不定形な働き」(amorphous agency)を完全に認めてしまう

と、そのような場合の性的な主体形成はあまりにも無秩序となってしまうので、それはまずい、だからと言って、教育は主に社会全体の福祉の保障と秩序の維持のためだといって、性の多様性を抑圧するわけにもいかないから、その間のどのあたりを落としどころとして教育をすべきか、まさか、単純な男女の区別といった旧来の性別をすべて破壊して教育するわけにはいかないし、だからと言って昔ながらの法に基づいた道徳教育と古臭いジェンダーの枠組みで教えるわけにもいかない、どの辺で線引きするべきだろうか、という問題が、今の教育のひとつの根本的な問いとして提示されてきている。すでに現代では軍隊の組織編成ばかりでなく、主体形成のレベルで「不定形な働き」(amorphous agency)が問題になっているが、この問題は先駆的に20世紀初頭の社会では軍隊の組織編成の問題として出てきていたのであろうということをここでおさえておきたい。

話をもとに戻そう。この歴史的背景をフォークナーの生涯と重ね合わせてみると、フォークナーの生涯は、1885年の軍事諜報機関の萌芽的な始まりと発展に引き続く、未発達な諜報機関からの情報に基づいた米西戦争でのアメリカの劇的な勝利から始まる。このようなパターンは第一次世界大戦では軍産複合体のあやふやな組織が不定形な形態のまま運用されていきながらも、アメリカは戦勝国の一つとなり、その後第二次世界大戦を経て冷戦へとアメリカが突き進む中、大統領さえも統制が効かない軍産複合体という巨大な組織へと発展していったというかたちで繰り返される。フォークナーは、二つの重要な軍事部門が不定形な働きを持つ名もない部門として生まれ、その後に大きな影響を与えることとなるという経過を生きてきた。同時に、アメリカ帝国主義のもとでの国力の拡大の中で、アメリカ国民のほぼ全員が、たとえ不定形な働きであったとしても、常に相手に対して多方面にわたっていつでも不快な経験を与えうる体制を取っておく状況を作っておくことが大変有効だ、そういう価値観を皆が共有していくさまを目の当たりにするという状況を生きた。

このような認識の上で、フォークナーは『寓話』の中で、第一次世界大戦を舞台にして、軍隊が作り出す「不定形な働き」(amorphous agency)を研究したのではないか、と言う仮説に立ってみたい。つまり、アメリカはその軍事組織

の生成の中で米西戦争から第二次世界大戦に至るまでつねに「不定形な働き」(amorphous agency)を作り出し、他者に対して多方面に渡っていつでも不快な経験を与えることができる体制を整えておくという状況を作り出しながら、自国の国力を高めていった。そして、フォークナーは、こういう軍隊のあり方によって、なんでもありの戦争機械が跋扈することになっていくけれども、その傾向に対して人間は抵抗できるのか、というを、彼の小説『寓話』のテーマにしたのではないかと思われる。その上で、結論を先取りして言えば、このテーマに対する答えとして、『寓話』におけるフォークナーは、彼の同時代人の科学者ノーバート・ウィーナーの『サイバネティクス』の発想と同じように、他人に不快を与えることだけを目的とした戦争機械を発展させる軍隊や戦争に対抗して、個人間において人間や機械や動物を含めた関係による別の「不定形な働き」(amorphous agency)を作り出すことができるし、その個人間の形なき組織が、不快を避け、快楽と平安を求める可能性があることを示そうとしているようだ。つまりアメリカが総力戦（全体戦争）で勝利を収めるために「不定形な働き」(amorphous agency)を使用したのに対して、フォークナーは、同じように「不定形な働き」(amorphous agency)を人間は作り出すのだけれども、それは個人間の人間、機械、動物のなかに作られてゆき、この戦争機械とは別の形で形成される人間と機械と動物の間の「不定形な働き」(amorphous agency)は、不快を他人に与える負の連鎖に陥ることなく、快楽と平安を求める機運をもつと提示しているのではないか、と読んでみたい。このような読みが成り立ちうるかについて、次に、すこし『寓話』の内容に触れながら考えてみよう。

2．不快と快楽：エピクロス的な『寓話』の読みの可能性

フォークナーの『寓話』は第一次世界大戦を題材としており、主に南部を舞台にした小説を書いてきたフォークナーの経歴の中では異質な作品だが、ここではフォークナーの後期作品全体を、他者に対して不快な行為を徹底的に行う人間集団が、名前もつけられないままにどのように社会において権力を拡大してゆくのか、また、そのように他者に対して常に不快な行動を行う集団の示す価値観に対して、我々はどのような価値観を提示したら良いのかと言うテーマ

を徹底的に追求しているのだと考え、この『寓話』という作品も、他のフォークナーの後期の作品と共通するテーマが見出せるものとして読んでみたい。フォークナーの後期の代表作品には『町』(*The Town*)と『館』(*The Mansion*)というふたつの作品が含まれているが、これらの作品で主人公になっているのはスノープス一族という、怪しげでよくわからないことをしているのだけれども、他人に対して不快なことをすることだけははっきりしていると言う一族である。その一族が、旧弊な南部の田舎町で権力を拡大し、ついには社会的な地位につく言う様子を描いている。いわばスノープス一族は、同時代のアメリカの軍隊組織の実態を矮小化してしめしている一族であり、彼らは「不定形な働き」(amorphous agency)として、それまでの規範には当てはまらない行動をして、多方面に関係を結び、人々に常に不快を与えながら、しかしその不快を与えることを彼らの及ぼす力の源泉として利用しつつ、田舎の小さな社会の中で影響力を強め、のし上がってゆく。

『寓話』についても、初期の書評や研究が示すようなキリスト教的な象徴主義的読みから解放された上で読んでみると、そこで頻繁に目につくのは、まずなによりも、戦争が繰り返し与える不快な感覚を伝えている部分である。この小説では戦争が不快なものであると言う経験が様々な表現で繰り返し描かれ、なぜそのような不快な経験をする戦場にわざわざ出向かなければいけないのかという疑問を読者に執拗に与えながら、同時に戦場へと出向く兵士たちが、戦場で出会う苦痛や恐怖をなんとか合理化したり、あるいはそれに対して無感覚になることによってそれに耐えようとする場面が目につく。一つの例として、ここでは戦争で兵士が何度も受ける苦痛と恐怖を、若い兵隊が歯医者での治療の比喩を使いながら語っている場面を示してみよう。

> そのときにはこわくないもんですよ。そいつは、あとになって怖くなるんですね。まあ、歯医者のドリル機みたいなもんで、患者が口も開けないうちにもうぶんぶん唸り出している。患者は口を開けなくちゃいかん。そして歯が治ることになっていると思います。だがしかし、歯が治ると思うことも、口を開けることも、役には立つまい、というのは、それからまた口

を閉じた後でも、あのドリル機は患者に向かって、次の瞬間か、または翌日か、それとも半年くらいはたっぷり経ってからかもしれませんが、またぶんぶん唸り出して、もういっぺん口を開けなくちゃならず、とにかくそれは、いずれはブンブン唸って患者はどうせまた口を開けなくちゃならない、というのはほかにはゆきどころがないんだから . . . 多分、そういうことなんですね。それがあまり遅くなりすぎて、我慢もできなくなったときには、殺されることもちっとも気にならなくなるんでしょう。[17]

この場面では、一般の人々も経験する、苦痛を伴う歯医者の治療の比喩によって、戦場での不快な経験が何度も迫ってくる感覚がよく表現されており、読者もまた戦場での不快な経験を共有できる場面である。この当時の戦争の状況を考えるとこのような恐怖の感覚は当然のことであった。当時の総力戦は、敵の戦力についての情報が十分ではなく、物資の供給もうまくいかず、現場における軍隊の作戦遂行も理不尽なものが多かったので、前線に行くたびに、兵士たちは戦場で敵味方問わず理不尽で不快な経験をすることがわかっていた。しかしここで改めて確認しておかなければいけないのは、歯医者の治療と同じく、戦場は組織的に不快な経験を再生産し続ける場所であり、兵士となる訓練とはその不快な経験に慣れて、最終的には殺されることも気にしない精神状態となり、最終的には自分が戦場で殺されることに関しても無感覚になることが示されている点だろう。

このように戦争が不快な経験を再生産し続けることについて、フォークナーは小説家としてのキャリアの始めから一貫して意識的だった。たとえばフォークナーの小説家としての第一作は、第一次世界大戦とそのために顔をひどく損傷した退役軍人をめぐる小説だが、その始まりにフォークナーは次のような寸劇を掲げる。

アキレス：士官候補生、今朝髭は剃ったのか？
マーキュリー：はい、剃りました。
アキレス：一体何で剃ったんだ、士官候補生。

マーキュリー：官給品であります、教官。
アキレス：そうか、それなら行っていい。[18]

一体、何のためにこのような寸劇がフォークナーの小説第一作の冒頭に書かれているのかというのは、なかなか分かりにくいが、これを戦争による不快な経験の再生産が意識化されている場面と捉えてみると、わかりやすいかもしれない。ここで描かれている場面は、士官候補生が髭も剃らずにみっともなく無精髭を伸ばしているように見えるので、それを教官が咎めている場面である。士官候補生は髭を剃ったと言い張っているのだが、どうみてもきちんと剃ったようには見えない。教官は一体何で髭を剃ったらそうなるのか、と聞くのだが、士官兵は官給品で剃ったという。官給品の剃刀の質が劣悪で、ほとんど剃ることができないということは教官もよくわかっているので、それなら仕方がない、ということで、教官は士官候補生をそのまま許すことになる。

この場面で皮肉られているのが、戦争の際に兵士やあるいは士官候補生に支給される官給品の劣悪さであることは明らかだが、この官給品の劣悪さによって、髭が剃れずにみっともないままに過ごさなければならないという不快さが再生産される点に注目してみると、産業と国家権力が一体化し、粗悪な官給品をつくってそれを下級兵士や候補生に消費させて利益を上げる、この戦争によって再生産されつづける不快さ、そしてまたその不快な経験を押し付けられても、それを甘受せざるを得ない兵士、あるいはそのような不快な経験に慣れていかざるを得ない戦争に巻き込まれた大衆という存在が、フォークナーの小説の第一作の主題ともつながっていく。フォークナーの小説第一作『兵士の報酬』では、顔を醜く抉り取られながらも生き延びた若き退役軍人が故郷の家族のもとに帰り、周囲の人々がその顔を見るたびに大きな苦痛を感じるというのが大まかな話の流れとなっている。いわばこの小説は、第一次世界大戦中とはいえ戦場にならずに平和に過ごしている南部の人々の間に突然悲惨な負傷兵が退役軍人として帰ってきて、南部の田舎の人々に、戦争が徹底的に不快な経験を再生産し続ける構造を持っていることを嫌が応にも意識させることになることをあらわにした小説である。ただその一方で、この顔に傷を負ったドナルド・

マホンの顔の傷は、マホンが戦争に行く前に婚約を済ませていたセシリー・サンダーズをはじめ、女性たちにその名誉の負傷である顔を愛さなければならないとの義務感を与え、そしてまた、そのように女性に愛されるマホンを見ることで、他の男性たちもその傷を欲しがるようになる、すなわち、不快な経験を一つの価値として称えるようになるという仕組みに人々が馴致されてゆく様が描かれる。

ここで、いわゆるアメリカン・モダニズムの代表作の一つであるヘミングウェイの『我らの時代に』においても、ほぼあらゆる短編が、戦争あるいは人間生活の与える不快な経験を、いわば平気な顔をして耐えるといいうハードボイルドの美学によって貫かれた作品であることを思い出してもいいかもしれない。『われらの時代に』の冒頭を飾る短編の「インディアン・キャンプ」では、主人公は父親とともに不快に満ちたインディアンの村の出産に立ち会うが、あたかも不快の経験はそれ自体が人間が生まれ出る時からの運命として与えられるものであり、また、不快な経験こそが父と子をつなぐ絆となりうると描かれているかのようだ。そしてそれに続く短編の多くでも主人公は不快な経験を通じて成長してゆく。1920 年代のアメリカン・モダニズムのいわゆる失われた世代の作品の多くは、その美学の核として不快な経験を美的な経験として昇華させるという傾向を示している。

フォークナーの後期作品である『寓話』は、このようなフォークナー自身もモダニズム作家として加担して作り出してきたモダニズム作品がもつ不快な経験を美的な経験として昇華するという傾向から決別した作品である。むしろ、第一次世界大戦を舞台にした小説、フォークナーの『寓話』では、戦争が美的な昇華をされることなく、不快な経験であるという主題が真正面から語られ、その不快な経験に加担することを現場の兵士たちが拒否することができるかが問われている作品だと言ってもいいだろう。

もちろん、戦場では、命令を受けたらそれに逆らうことはなかなかできない。『寓話』の第二章冒頭では、戦争の現場をいくたびも経験した経験豊かな軍人の師団長（division commander）に理不尽な作戦命令が下され、経験豊かな師団長グラグノンはその作戦が必ず失敗することがすぐにわかるが、それにもかか

わらずその命令に従うという場面が描かれる。

> 攻撃命令が最初に師団長に伝えられた時、. . . 彼は理解しかねるように思った。だが、その感じはすぐになくなった。というのは次の瞬間にその全貌を見たからである。この攻撃は、生まれぬ先から呪われた運命を持っており、それを指揮するものが、この攻撃とともに悪運を生み出すことになるのだ。それは彼の訓練された専門家的判断は、兵団長が提示した通り、その仕事が際どいものであり、それゆえ勝敗不明どころではないと、自分に教えたためではなかった。それは彼を止めようとはしなかった。それどころか、昔の運命は決して自分を見捨てはしないで、一つの戦を挑んできたのではあるまいか。なぜかと言えば、その同じ鍛えられた判断は、即座に次のことを、つまりこの今度の攻撃はもともと失敗するように計画されたものであり、さらに膨大な計画の中において滅び去るべく図られた犠牲であり、この攻撃が成功しようと失敗しようとどちらでもよろしいのであり、攻撃が必ず行われさえすれば良いのだということを見抜いた。[19]

この描写は、第一次世界大戦における理不尽な軍事作戦がどのようなものかをよく表している。しかもこのような理不尽な命令を遂行しても、作戦指揮をする師団長は死ぬことはないが、しかし前線の兵士達はただその意味不明の命令に従って、そして自分の従っている作戦の意味もよくわからないままに負傷し、あるいは命を落とすという状況が描かれる。

フォークナーの『寓話』では、こうして、戦争は不快な経験であり、作戦が理不尽であるという主題が真正面から語られ、そして話の筋の中心となるのは、このように不快な経験、理不尽な作戦によって前線の兵士が不快な恐怖を感じ、とうとう戦争を放棄するまでの顛末である。この小説での前線の兵士たちは、家を恋うる思い、妻や特別手当、水っぽいビールや、それを十分に買うにも足りない兵士の日当、さらには死の恐れ[20]という、戦争における不快な状況を十分に味わってきた人間として描かれる。彼らはみな死の恐怖に怯え、絶望しており、また、彼らは自分たちの不愉快な状況をごまかすために、ひっきりなし

に酒を飲む。

このような状況のなかで、兵士たちが、自分達はもはやこれ以上不快な戦闘という選択肢を選ばない、武器を捨てて快楽と平安へと向かおう、と決断する機運が芽生えてくる。例えばある場面で老門衛が「我々、つまり軍曹や伍長なんかじゃなく、ただ、われわれ、われわれのすべて、この泥の中にいるドイツ人も、植民地人も、フランス人も、その他の外国人も皆が、言わねばならぬことは――もうたくさんだ、ということだ。皆で言うのだ。もうたくさん。もう死んだもの、不具にされたもの、行方不明になったもの――みんなもうたくさんだ」[21] と言うように、すでに前線の兵士全体が戦闘にうんざりしているため、兵士全員がこの不快な状況を耐えがたいものと感じ、もはや耐えるべきものではなく、すでに不快は十分だ、もう不快はたくさんだ、という意識を共有さえすれば、そこでたちまち戦闘は終わるのだという認識が語られる。

ただし、前線の兵士たちが皆、戦争の不快な経験にうんざりし、戦闘をやめたいと思ってはいても、なかなか戦闘放棄という行動にまでは結びつかない。そのためには何かきっかけが必要なのだが、そのきっかけの役割を担うのが、『寓話』のなかでは、戦闘を放棄するように促すフランス軍の 13 人の兵士である。

では、これら 13 人の伍長とそれに従う兵士はどのように描かれているのだろうか。キリストと 12 人の弟子のように、高潔な使命感を帯びた人間たちとして描かれているのだろうか。どうもそうではないようだ。次の描写にあるように、反乱が起こったのち、戦争放棄を説いた罪で捕らえられた 13 人の兵士の様子は、惨めに鎖につながれ、その様子は「野獣」(wild beasts)のようであったと描写されている。

> 他の車には人間が立ったままぎっしりと詰め込まれていたが、この車にはわずか 13 人しか載っていなかった。このものたちは、やはり帽子を被らず、汚く、戦塵にまみれていたが、手錠がかけられ、互いに鎖で繋がれた上、それが野獣のようにトラックに繋がれていた。それゆえ最初にちょっとみると、異邦人と見えるどころではなくて、他の種類の動物、すなわち

人間以外の種族のように思われた。[22]

このような「野獣」のような 13 人の人間にほだされて、三千人の兵士たちは戦闘をやめて反乱する。では、その 13 人の兵士たちにほだされて、反乱を起こし、戦争をやめてしまった三千人の兵士たちが、実際に戦闘をやめたときの様子をみてみよう。以下の場面では人間と機械と動物が一体化したような比喩が用いられ、「電話線上に一列にならんだ小鳥たちが、同じ瞬間に一羽の鳥のように飛び立つ」ようだったと描かれる。

知り得たのは、ただ、昨日の夜明けにその連隊が反乱を起こして攻撃を拒否したということだけであった。その連帯は攻撃に失敗したというのではなかった。ただ攻撃すること、塹壕を離れることを、攻撃の以前にも、公的開始時にも、拒否した . . . 中隊長も、分隊長も、士官も下士官も、すでに壕から這い出ていたが、振り返って後を見ると、一人として彼らに続くために動き出す兵のいないことがわかった。兵から兵への何の信号も合図もなく、しかも三千人の兵士全体が一個連隊の正面全体に一列になって散開し、連絡はなくともただ一個の人間のように行動した――これはもちろん逆の例だが――電話線上に一列にならんだ小鳥たちが、同じ瞬間に一羽の鳥のように飛び立つのを思わせた。[23]

こうして、13 人の呼びかけに呼応して、戦争をやめた兵士たちの集団は、最終的には電話線の上の小鳥が飛び立つように、武器を捨て、一斉に戦争をやめた存在として表現される。その後、反乱をしたかどで捕らえられ、収容された兵士たちの様子は「それは全然人間的ではなく動物的(it was not human at all but animal)」といった描写をされ、さらに先に進むと、原形質のように「形を失ったかたまり」(a shapeless mass) として、まさに不定形な働きのような存在となっている。

それはまた、一個の連帯をなしているというよりは、ただいくつかの班

や小隊が何らかのつながりを持っているだけの、形をなさない一つの集団というべきもので、それは、おいた手を食った一都市の人々の結合がただ家族集団の中において、それが血における親戚だという理由からではなく、それまで共に食し共に眠り、互い同士で悲しみ、祈り、争ってきたというためにできていると同じであって、彼らは身動きせずに固まって、高くて登ることもできぬ鉄条網や探照灯や機関銃座や。ぶらぶらしながら人を見下している番兵たちのもとで、まばたきし、いずれも落日の光に輪郭だけを載せ、あたかも鉄条網に十分前に流された死の衝撃が、その同一瞬間に、彼らを電気で殺して、時の終わりまで、身動きならぬ停止状態に置いてしまったようであった。

市に新たな騒擾(そうじょう)が起こった時にも、彼らはまだそこにかたまっていた。太陽は沈み、ラッパもなり終わって止んでおり、号砲が古い城塞から轟いてピタリと闇、遠くにこだまし、そして平地の彼方から最初の微かな叫びが聞こえてきた時、固まっていた連隊は、閲兵場の中央で、すでに一つの曖昧な群衆となって溶けつつあった。しかし彼らは、もっと静粛になること以外は、最初は何もしなかったが、それはサイレンの高まってゆく音が、人間の耳には全く聞こえないような耐えがたい高さに達しようとする場合に、犬がそうするのと同様であった。つまり、彼らが実際に物事を立て始めた時、それは全然人間的ではなく動物的であって、恐高く叫んだのではなく、声を長く引いて、そして原形質のように――初めて海が分離した時の海床(うみどこ)の上で、目もなく舌もなく、それ自身の動きも音も持たないが、ただ資源の空間を打ち破る潮の強力な衝撃の巨大な騒音に応じて打ち震えて響きを立てた原形質のように、闇のうちに溶解し形を失ったかたまりとしてよりそい、その時に頭上の隘路や台座ではセネガル兵たちが、ライフル銃にもたれかかったり、タバコに、廃物になった薬莢を工夫して作ったライターの、風を受けない小さな炎をつけたりしており、それは、ひるまのくるめく光が今まで隠していたものが夕闇によって暴露されたように思われた。そして、彼らを動きなき炭素に化した電撃がそこここに、まだ消え去らない炭火を散らばせているように思われた。[24]

ここで、戦争を止めて反乱を起こした兵隊たちの様子が、ほとんど秩序のない、「形を失ったかたまり」(a shapeless mass) のような集団であることに注目したい。この表現によって、戦争をやめた兵士は一見すると規律や秩序を失い、お互いに個人的に繋がっているだけの、動物のように限りなく不定形になった集団状態であることが示される。

フォークナーはなぜこのように、『寓話』において、戦争をやめるということと、彼らが動物的な状況に近づき、さらには原形質のように秩序だった様相を失った集団となったを強調するのだろうか。[25] 彼らが動物の集団のようになり、もはや人間的秩序のない状態に陥った状態を「原形質」のような不定形の状態と表現しているのなら、そこでかれらに作用する「動物的な働き」(animal agency) とはどのようなものだろうか。

ここで、「動物的な働き」(animal agency) について定義した最も古典的な例として、古代ギリシアのエピクロスの「動物的な働き」(animal agency)の定義をみてみよう。ジャン＝マリー・ギュイヨーは、その著名なエピクロス論『エピクロスの倫理学(*The Ethics of Epicurus*)』の中で、次のように述べている。

> 「動物というのは」とエピクロスは言う。「あらゆるそのほかの性質の何よりもまず、快楽を求める性質をもっている。それこそが動物のうちにあってあらゆることを判断する際の純粋で全てを統括する性(さが)なのだ。」[26]

このエピクロスの言葉に従って、「動物的な働き」(animal agency) を、原則として何よりもまず「快楽」(pleasure)を追求することであると考えてみよう。すると、『寓話』の中で追い詰められ、動物的状態になった時の兵士達が追求するものは、まず何よりも不快な状況からの脱却であり、快楽の追求だと言うことになる。

動物が何よりも快い状態を追求するものであることは、近現代に至るまで、「動物的な働き」(animal agency) の本質として、繰り返し語られ、同時に、それは人間にも共通する性質として論じられている。たとえば、現代の動物観の中では、2017 年の論文の中で、チャールズ・T・ウルフ(Charles T. Wolfe)は

18 世紀のアンソニー・コリンズ（Anthony Collins）の言葉を引用しながら、動物は人間と同じように、痛みを避けて快さを求めると論じている。[27]

エピクロスからウルフに至る「動物的な働き」(animal agency）についての見方においては、人間と動物に共通する行動原則として、不快を避け、快楽を追求するということにその根元を置くという考え方が語られている。フォークナーも同様に、『寓話』では、そのレトリカルな表現において、戦場における劣悪な状況の中で動物に近づいた兵士達が、もはやそれ以上の過酷な状況に耐えられずに戦闘を放棄し、動物が不快を避けて快さを求めるのと同じように、戦争という不快を避けて、快楽と平和を求め始めるという状況を描こうとする。人間は近現代の戦争において、名前もあやふやで掴み所のない「不定形な働き」(amorphous agency)を軍隊組織の中に作り出しながら、全面的に敵に対して不快な経験を与える戦争を続けてきたが、それに対し、フォークナーは、同時に、このような、人に不快な経験しか与えない戦争の最前線では、もう一つの「不定形な働き」(amorphous agency)が前線で戦う兵士たちの中に生まれるさまを描き、それはついには一斉に三千人の兵士が前線で戦闘放棄を行うと言う、戦場での反乱を起こすことができる可能性を描く。それが、フォークナーが『寓話』で描き出した、マシューが言うところの「民主的革命」(a democratic revolution)であり、また、ワトソンの述べるところの「相互に関わり合う生の持続性のなかの古くて新しい集合体」(a new, and very old, collectivity in biological continuity with each other)の具体的な内容ではないだろうか。

3．『寓話』とサイバネティクス

フォークナーが描いた『寓話』において、前線における過酷な状況の中、人間と機械と動物が近接した世界において、人間が戦闘を止めるという判断を、いわば動物的とも言える衝動の中で選択するのではないかという希望が描かれていると解釈した。そのうえで、このような内容を描き出すフォークナーの『寓話』は、彼の同時代のどのような思想動向とリンクしていく可能性があるかを考えてみよう。第二次世界大戦後の、冷戦が始まろうとする 1950 年代に、第一次世界大戦の世界を描き出すという、一見するとアナクロニズムに満ちた主題

を持つフォークナーの『寓話』だが、その主題には、この当時の最先端のテクノロジー研究の発想とも共通する要素があったと思われる。それを示すために、フォークナー(1897-1962)とほとんど全く同時代に生きて「サイバネティクス」の概念を提唱した科学者、ノーバート・ウィーナー(1894-1964)を取り上げる。フォークナーが1897年生まれで1962年に死んで、ノーバート・ウィーナーが1894年に生まれて1964年に死んでいるので、全くこの二人はまったくの同時代人と言っていいだろう。ここで、フォークナーの『寓話』(1959)において描かれた人間と機械と動物の関係の描写は、ウィーナーの『サイバネティクス――動物と機械における制御と通信』(1948)[28]における人間と機械の動物の関係の概念に近づいているかを検討することにしたい。

ノーバート・ウィーナーは、第二次世界大戦前夜に、アカデミックな研究と産業と軍隊の緊密な関係のもと、軍事技術開発研究と深い関わりを持って自分の研究者としてのキャリアを積み上げてきた科学者である。しかしウィーナーは、第二次世界大戦後にその研究方針を転換し、倫理的観点から自分の技術が軍事転用されることを断固として拒否する意見書「ある科学者の反乱」を『アトランティック・マンスリー』に掲載[29]し、その翌年に『サイバネティクス――動物と機械における制御と通信』の初版を出版した。この著作でウィーナーは情報のインプット、アウトプット、フィードバックという現在でも使われている概念を創出したが、同時に、『サイバネティクス』の副題の『動物と機械における制御と通信』という言葉にも表現されているように、その情報回路を単純に人間と機械との間の情報の交換として構想せず、そこにもう一つ動物という要素を加えて、人間と機械と動物との間に共通する情報の交流を目指すネットワークを構想した。そこにはおそらくウィーナーの、自分の科学的発想の中になんとかして科学の軍事利用というものに対する歯止めをかけようという意図が埋め込まれていたであろうし、そのようなテキストであるウィーナーの『サイバネティクス』を、フォークナーの『寓話』と同時代に出版された書物として関連づけて読むことが可能だろう。

ノーバート・ウィーナーのサイバネティクスの概念がどのようなものか、もう一度おさらいをしておこう。ウィーナーは、機械、動物、人間の相互関係を

統一的に扱う学問の領域を最終的に「サイバネティクス」と名付けるプロセスを次のように説明した

> このようにして４年ほど前にはすでに、ローゼンブリューと博士と私のまわりの科学者のグループは、通信と制御と統計力学を中心とする、一連の問題が、それが機械であろうと、生体組織内のことであろうと、本質的に統一されうるものであることに気づいていた。他方、我々はこれらの問題に関する文献に一切の統一のないこと、共通の術語のないこと、またこの分野自身に対する名前一つないことに甚だしく不自由を感じた。この分野の名前について我々は塾講した結果、既存の術語は皆どこか一方に偏っていて、この領域の将来の発展まで含めて表すには不適当であるという結論に達した。そこで科学者がよくするように、ギリシア語から一つの新造語を作って、この欠を補わざるを得ないということになった。それで我々は制御と通信理論の全領域を機械のことでも動物のことでも、ひっくるめて‘サイバネティックス’(Cybernetics)という語でよぶことにしたのである。これは‘舵手’を意味するギリシア語キュベルネーテース（ギリシア語：Κυβερνήτης）から作られた語である。この言葉をえらんだ理由の一つは、フィードバックの機構に関する最初の重要な研究論文が1868年にクラーク・マクスウェルによって書かれた調速機(governor)に関するものであって、さらにgovernorがキュベルネーテース（ギリシア語：Κυβερνήτης）のラテン語の訛りから生まれたものであることを想起したからであった。また、船の操舵機はフィードバックの機構のうち最も古く、しかも最もよく発達した形式のものであったという事実も述べておきたい。[30]

ここでウィーナーが「サイバネティクス」が指し示す状況として述べている「通信と制御と統計力学を中心とする、一連の問題が、それが機械であろうと、生体組織内のことであろうと、本質的に統一されうる」という状況は、フォークナーの『寓話』の戦場での兵士たちの「三千人の兵士全体が一個連隊の正面全体に一列になって散開し、連絡はなくともただ一個の人間のように行動した――

これはもちろん逆の例だが――電話線上に一列にならんだ小鳥たちが、同じ瞬間に一羽の鳥のように飛び立つのを思わせた。」(he entire three thousand spread one-man deep across a whole regimental front, acting without intercommunication as one man, as—reversed, of course—a line of birds on a telephone wire all leave the wire at the same instant like one bird)との記述の中で、人間と電線という機械、そして小鳥という取り合わせの中で、象徴的に示されている。フォークナーのこの文章はいわば、人間と機械と動物を含めた共通の情報流通の中でそれらが統合される状態を示す表現であり、そしてその表現の中で、フォークナーはいわばサイバネティクス的な状況が実現された時、人間はむしろ不快を目指すことなく、動物と同じように快楽と平和へと向かうことを示したかったと思われる。

興味深いのは、『サイバネティクス』の記述の中で、ノーバート・ウィナーは、機械や人間や動物に共通する衝動としての「快楽」(pleasure) を書き込み、それが破滅状態を避ける可能性があることを指摘している点である。ウィーナーは、人間の作り出す回路には良い方向へ向く可能性と悪い方向へ向かう可能性のどちらもありうるといいながらも、その直前にパブロフの犬の例を引きながら、「パブロフの観察した動物の反応は、過程を成功に持ってゆくように、または破滅状態(catastrophe)を避けるようにはたらく」[31] と述べている。これはいわばエピクロスの述べた、動物が不快を避けて快楽へと向かう傾向を持っているということを言い換えた現代版であると言ってもいいだろう。ウィーナーは、私たちが作り出す情報回路の中に「動物的な働き」(animal agency)を含もうとすれば、それは必然的に破滅を回避し、快楽へと向かう機能を持つと暗示しているかのようだ。このようにサイバネティクスを記述することによって、ウィーナーは、自らが頭の中に思い描いた人間、機械、動物を含む情報回路のなかに、破滅を回避する可能性を本質的に入れ込むことができるのではないかという、一縷の希望を込めている。その希望は、同時代のフォークナーが『寓話』のなかで示そうとした希望と同じものであったのではないだろうか。

結論

フォークナーは、『寓話』のなかで、近現代の戦争は理不尽にも不定形な働きの戦争機械を作り出すが、それに対抗して、人間と機械と動物の作り出す形なき個人的な関係はどのように抵抗できるかを考察しようとした。そして『寓話』において、非人間的な戦争機械へ向かう軍隊組織の中、戦場で兵士たちが過酷な状況の中で動物のような状態になっていくことを描き出しながら、それと同時に、その動物的な状況は、兵士たちに戦闘という不快を避け、快楽を求めて戦闘放棄をする可能性があるのではないかという考察を示している。フォークナーのこのような発想は、1948 年に『サイバネティクス』の名のもとに人間、機械、動物に共通する情報回路を構想したウィーナーの発想につながるものと考えられるだろう。フォークナーが『寓話』の中で示した考え方、人間と機械と動物との快楽を求める交流こそが、戦争によって世界が不快な方向へと向かってしまうのを止める力となるという観点は、現在でも、テクノロジーと社会の発展の方向を間違ったものにしないためには大切な視点であろう。

Works Cited

Adams, Gordon. *The Politics of Defense Contracting: The Iron Triangle*. New Brunswick: Transaction Books, 1981.

Bethel, Elizabeth. "The Military Information Division: Origin of the Intelligence Division." *Military Affairs* 11.1 (1947): 17-24.

Chu, Patricia E. "Faulkner and Biopolitics." The New Cambridge Companion to William Faulkner. Ed. John T. Matthews. New York: Cambridge UP, 2015. 59-73.

Cowley, Malcolm. "Faulkner's Powerful New Novel." 1954. *William Faulkner: The Contemporary Reviews*. Ed. M. Thomas Inge, Cambridge: Cambridge UP, 1995. 370-72.

Davis, David A. "Faulkner's War Stories: World War I and the Origins of Yoknapatawpha." *Mississippi Quarterly*, vol.73 no. 1, 2020, pp.17-34. DOI: 10.1353/mss.2020.0008.

Deleuze, Gilles and Félix Guattari. *A Thousand Plateaus: Capitalism and. Schizophrenia*. Trans. Brian Massumi, Minneapolis: U of Minnesota P, 1987.

Eisenhower, Dwight D. "President Dwight D. Eisenhower's Farewell Address (1961)" <https://www.archives.gov/milestone-documents/president-dwight-d-eisenhowers-farewell-address>

Faulkner, William. *A Fable*. 1957. *William Faulkner: Novels 1942-1954*. New York: The

Library of America, 1994. 327-722.（フォークナー『寓話』上下 阿部知二訳 岩波書店、1974 年）

――. *Soldier's Pay*. 1926. In *William Faulkner: Novels 1926–1929*, 1–256. New York: Library of America, 2006.

Gilbert, James L. *World War I and the Origins of U.S. Military Intelligence*. Lanham: Rowan and Littlefield, 2015.

Gordon, Phillip. "Faulkner in a Time of Pandemic: Tracing the Influence of the 1918 Influenza in His Works." *Mississippi Quarterly* 72.4 (2019): 467-83.

Gounari, Sotiria-Ismini. "Affective Politics and 'Crisis': The Example of the HIV-Positive Women's Public Denouncement and of the Refugee's Confinement." *Deleus and Guattari's Philosophy of Freedom: Freedom's Refrains*. Eds. Dorothea Olkowski and Eftichis Pirovolakis. Trans. Constantin Boundas and Andrew Goffrey. New York: Routledge, 2019. 89-105.

Guyau, Jean-Marie. *The Ethics of Epicurus*. Eds. Keith Ansell-Pearson and Federico Testa. London: Bloomsbury Academic, 2022.

Hoffman, Frederick J. *William Faulkner*. 1961. New Haven: College and University Press, 1966.

Koistinen, Paul A. C. *Mibilizing for Modern War: The Political Economy of American Warfare, 1865-1919*. Lawrence: UP of Kansas.

Matthews, John T. *William Faulkner: Seeing through the South*. Malden, Mass.: Wiley-Blackwell, 2009.

McCarthy, J., et al. "A Proposal for the Dartmouth Summer Research Project on Artificial Intelligence." August 31, 1955. <http://jmc.stanford.edu/articles/dartmouth/dartmouth.pdf>

Millgate, Michael. *The Achievement of William Faulkner*. London: Constable, 1965.

Nixon, David and Nick Givens. "Queer in England: The Comfort of Queer? Kittens, Teletubbies and Eurovision." *Queer in Europe*. Eds. Lisa Downing and Robert Gillett. London: Routledge, 2011. 41-56.

North, Sterling. "Mr. Faulkner's Strange Fable"1954. *William Faulkner: The Contemporary Reviews*. Ed. M. Thomas Inge, Cambridge: Cambridge Up, 1995. 381-82.

Wardrip-Fruin, Noah and Nick Montfort. *The New Media Reader*. Cambridge, MA: MIT P, 2003.

Watson, Jay. *William Faulkner and the Faces of Modernity*. Oxford : Oxford UP. 2019.

Wiener, Norbert. *Cybernetics: Or, Control and Communication in the Animal and the Machine*. Augusta, GA: Mockingbird, 2022.（ウィーナー『サイバネティックス――動物と機械における制御と通信』池原 止戈夫、彌永 昌吉、室賀 三郎、戸田 巌 訳 岩波書店、2011 年）

――. "A Scientist Rebels" *Atlantic Monthly* 179 (January 1947): 46. <https://cdn.theatlantic.com/media/archives/1947/01/179-1/132381596.pdf>

Wolfe, Charles T. “Boundary Crossings. The Blurring of the Human/Animal Divide as Naturalization of the Soul in Early Modern Philosophy.” *Human and Animal Cognition in Early Modern Philosophy and Medicine*. Eds. Stefanie Buchenau and Roberto Lo Presti. Pittsburgh: U of Pittsburgh P, 2017.

* 本研究は JSPS 科研費 JP21K00357 の助成を受けたものである。

---

[1] フォークナーの『寓話』からの引用は、原文については *A Fable*. 1957. *William Faulkner: Novels 1942-1954* (The Library of America, 1994)から引用した。和訳に関しては、引用文献に掲げている訳本を参考にさせていただいた。

[2] フィリップ・ゴードン(Phillip Gordon)の論文の次の記述を参照 : “Though written long after the war, A Fable drives its plot from the so-called mutinies in the French army in 1917. . . and is set in the spring of 1918” (480).

[3] William Faulkner’s new book is simultaneously a novel, a golden legend, and a passion play. Forsaking Yoknapatawpha country, Mississippi, and the whole South, which has been the scene f all his other novels, he takes us to the Western battlefront in the spring of 1918. Forsaking the novelist’s world of probable actions and plausible characters, he imagines that the Passion of Christ is re-enacted by a corporal in the French army determined to redeem the world from evil. (Cowley 370)

[4] . . . The core of his disturbing and compassionate tale is the central story of Christendom itself, complete with a Messiah, 12 disciples, Mary, Martha, Magdalene and all other characters essential to the drama. / This re-enactment of the Passion Week, however, occurs in the spring of 1918, when, as you may remember, there was wholesale mutiny, principally among the French.” (North 381)

[5] The illiterate French corporal who leads the mutiny in A Fable is an adaptation of the Christ and his twelve followers are like the twelve apostles. One of them betrays him; another denies him three times. The corporal is tempted by the Supreme Commander of the Allied armies, as Christ was tempted by Satan. He is killed by firing squad; and, when he fells, his head is caught in barbed wire——the modern equivalent of the crown of thorns. (Hoffman 111-112)

[6] Answering a question from Jean Stein about his use of Christian Allegory in A Fable, Faulkner commented that “the Christian allegory was the right allegory to use in that particular story, like an oblong square corner is the right corner with which to build an oblong rectangular house.” . . . This leads us admirably to the book’s central meaning and plainly indicates its didactic purpose, its dedication to an explicit message. (Millgate 233)

[7] Faulkner is very interested in what crowds can do, what masses might accomplish.

It's the genius of the corporal's mutiny that it challenges authority through a simple mass refusal to act. . . . That's a working-class vision worthy of a democratic revolution. When the Allied and Axis commanders conspire to restart the killing, Faulkner must be thinking of a common interpretation of World War I as a contrivance of financial and industrial classes alarmed by the prospect of imminent world-wide workers' revolution. (Matthews 276)

[8] Here we see a new, and very old, collectivity in biological continuity with each other. (Watson 300)

[9] 軍事諜報機関について、コイスティネンはその最初は小さく不定形なものであったとして "The army also established a unit that assumed intelligence and planning duties and appropriately became part of the General Staff in the twentieth century. With the army increasingly interested in military developments abroad and concerned about hemisphere security, the adjutant general's office in 1885 created an agency later called the Military Information Division (MID). The division's work abroad was strengthened when Congress created the attaché system in September 1888. By 1892 the rather small and amorphous agency began to grow in size, taking on greater responsibilities." (Koistinen 72)と述べ、また、軍産複合体についても、その元となる軍事産業委員会(War Indusrial Board について、その最初の組織は極めて不定形なものであった "The War Industries Board was the chief economic mobilization agency during World War I, but numerous temporary bodies helped mobilize the wartime economy. Through the importance of the agencies varied, as a group they played a significant role in maximizing the nation's economic might for hostilities. . . . Even at the end of the War, the WIB was sufficiently amorphous that additional responsibilities could well have done it severe harm." (Koistinen 255-56)と述べている。

[10] Bethel 17.

[11] The value and importance, to say nothing of the convenience of the service, of having military data respecting our own and foreign armies in available shape for the immediate use of the War Department wand the Army at large were subjects not seriously considered by the War Department Until an incident occurred in 1885. . . . At that time there was no General Staff, and none of the so-called staff departments were responsible for gathering and collating data on all subjects of military interest. . . .The assistance of the commanders of military departments and the chiefs of War Department bureaus "in the matter of increasing the efficiency of the 'Division of Military Information'" was requested in letters from The Adjutant General to these officers, dated November 23, 1886. The department commanders were asked to send in copies of reports of officers on hunting and fishing trips and on scouts near the frontier, as well as information concerning the resources of this country and neighboring foreign countries and concerning means of transportation. . . . A beginning was thus made in a small way, toward the establishment of a military

intelligence agency. Although usually referred to as the "Military Reservation Division, Miscellaneous Branch, The Adjutant General's Office. (Bethel 17-18)

[12] The division was always hampered by inadequate appropriations. Until 1894 it was dependent for funds upon whatever was allotted to it from the appropriation for contingent expenses of the War Department, but in that year Congress appropriated $3640 for the contingent expenses of the Military Information Division. This amount, which continued to be appropriated in the hears following, soon proved insufficient, and it was with great difficulty that Congress was persuaded to raise the appropriation. By 1903, the appropriation had only been increased to $10,000 and of this amount an allotment of $3000 was made to the manila Office of the division. (Bethel 24)

[13] Gilbert 5.

[14] Though this multifaceted structure was not ideal, it functioned with considerable efficiency. One of its principal virtues was the fact that the service stayed in a state of readiness for hostilities and would not face great problems in mobilizing in the event of war. (Koistinen 47)

[15] Gounari 91.

[16] The importance of studying sexualities in the world of education is underlined by Bourdieu's work on cultural reproduction and habitus. The inculcation of habitus within cultural and familial contexts, particularly amongst young children, provides the bodily 'taken as read' which is so dominant within sexualities discourses. . . . The notion of habitus as 'le sens du jeu' (the feel of the game) . . . or likened to the feeling of being 'a fish in water . . . provides not only an additional tool for exploring how schooling is sexualized, but may enable a middle way between the agency of social justice endeavours, and the more amorphous agency of postmodern discourse. . . (Nixon 45)

[17] You dont get frightened then; it's not until later, afterward. And then—It's like the dentist's drill, already buzzing before you have even opened your mouth. You've got to open your mouth and you know you're going to all right, only you know at the same time that neither knowing you are going to, nor opening it either, is going to help because even after you have closed it again, the thing will buzz at you again and you'll have to open it again the next moment or tomorrow or maybe it wont be until six months from now, but it will buzz again and you will have to open again because there's nowhere else you can go... .' He said: 'Maybe that's all of it. Maybe when it's too late and you cant help yourself any more, you dont really mind getting killed—' (*A Fable* 761-62)

[18] Achilles — Did you shave this morning, Cadet?
Mercury — Yes, Sir.
Achilles — What with, Cadet?
Mercury — Issue, Sir.

Achilles — Carry on. Cadet.

—Old Play.

(about 19 — ?)

(*Soldier's Pay* 3)

[19] When the attack was first offered him, ... he believed that he had not understood. But this passed, because in the next one he saw the whole picture. The attack was already doomed in its embryo, and whoever commanded it, delivered it, along with it. It was not that his trained professional judgment told him that the affair, as the corps commander presented it, would be touch-and-go and hence more than doubtful. That would not have stopped him. On the contrary, that would have been a challenge, as if the old destiny had not abandoned him at all. It was because that same trained judgment saw at once that this particular attack was intended to fail: a sacrifice already planned and doomed in some vaster scheme, in which it would not matter either way, whether the attack failed or not: only that the attack must be made (*A Fable* 684-86)

[20] the simple passions and hopes and fears—sickness for home, worry about wives and allotment pay, the weak beer and the shilling a day which wont even buy enough of that; even the right to be afraid of death(*A Fable* 726)

[21] 'Wasn't it just one before?' the old porter said. 'Wasn't one enough then to tell us the same thing all them two thousand years ago: that all we ever needed to do was just to say, Enough of this—us, not even the sergeants and corporals, but just us, all of us, Germans and Colonials and Frenchmen and all the other foreigners in the mud here, saying together: Enough. Let them that's already dead and maimed and missing be enough of this—a thing so easy and simple that even human man, as full of evil and sin and folly as he is, can understand and believe it this time. Go and look at him.' (*A Fable* 727)

[22] It was open, like the others, indistinguishable from the others, except by its cargo. Because, where the others had been packed with standing men, this one carried only thirteen. They were hat- less and dirty and battle-stained too, but they were manacled, chained to one another and to the lorry itself like wild beasts, so that at first glance they looked not merely like foreigners but like creatures of another race, another species. . . . (A Fable 681)

[23] only that at dawn yesterday morning the regiment had mutinied, refused to make an attack. It had not failed in an attack: it had simply refused to make one, to leave the trench, not before nor even as the attack started, but afterward—had, with no prewarning, no intimation even to the most minor lance-corporal among the officers designated to lead it, declined to perform that ritual act which, after four years, had become as much and as inescapable a part of the formal ritual of war as the Grand March which opens the formal ball each evening during a season of festival or carnival—the regiment had been moved up into the lines the night before, after two

weeks of rest and refitting which could have disabused even the rawest replacement of what was in store for it, let alone the sudden moil and seethe of activity through which it fumbled in the darkness on the way up: the dense loom and squat of guns, the lightless lurch and crawl of caissons and lorries which could only be ammunition; then the gunfire itself, concentrated on the enemy-held hill sufficient to have notified both lines for kilometres in either direction that something was about to happen at this point, the wire-cutting parties out and back, and at dawn the whole regiment standing under arms, quiet and docile while the barrage lifted from the enemy's wire to hurdle his front and isolate him from reinforcement; and still no warning, no intimation; the company and section-leaders, officers and N.C.O.'s, had already climbed out of the trench when they looked back and saw that not one man had moved to follow; no sign nor signal from man to man, but the entire three thousand spread one-man deep across a whole regimental front, acting without intercommunication as one man, as—reversed, of course—a line of birds on a telephone wire all leave the wire at the same instant like one bird, （A Fable779-780）

[24] So when the regiment, unarmed unshaven hatless and half- dressed, began to coalesce without command into the old sheep-like molds of platoons and companies, it found that nobody was paying any attention to it at all, that it had been deserted even by the bayonets which had evicted it out of doors. But for a while yet it continued to shuffle and grope for the old familiar alignments, blinking a little after the dark barracks, in the glare of sunset. 'Then it began to move. There were no commands from any- where; the squads and sections simply fell in between the old file-markers and -closers and began to flow, drift as though by some gentle and even unheeded gravitation, into companies in the barracks streets, into battalions onto the parade ground, and stopped. It was not a regiment yet but rather a shapeless mass in which only the squads and platoons had any unity, as the coherence of an evicted city obtains only in the household groups which stick together not because the members are kin in blood but because they have eaten together and slept together and grieved and hoped and fought among themselves so long, huddling immobile and blinking beneath the high unclimbable wire and the searchlights and machine-gun platforms and the lounging scornful guards, all in silhouette on the sunset as if the lethal shock which charged the wire ten minutes ago had at the same instant electrocuted them all into inflexible arrestment against the end of time.

They were still huddled there when the new tumult began in the city. The sun had set, the bugles had rung and ceased, the gun had crashed from the old citadel and clapped and reverberated away, and the huddled regiment was already fading into one neutral mass in the middle of the parade ground when the first faint yelling came across the plain. But they did nothing at first, except to become more still, as dogs do at the rising note of a siren about to reach some unbearable pitch which the

human ear will not hear at all. In fact, when they did begin to make the sound, it was not human at all but animal, not yelling but howling, huddling still in the dusk that fading and shapeless mass which might have been Protoplasm itself, eyeless and tongueless on the floor of the first dividing of the sea, palpant and vociferant with no motion nor sound of its own but instead to some gigantic uproar of the primal air-crashing tides' mighty copulation, while overhead on the cat- walks and platforms the Senegalese lounged on their rifles or held to cigarettes the small windless flames of lighters contrived of spent cartridge cases, as if the glare of day had hidden until now that which the dusk exposed: that the electric shock which had fixed them in carbon immobility had left here and there one random not-yet-faded coal.（FAB 872-874）

[25] ここで付記として、第一次世界大戦における世界観に「動物」を取り入れたフォークナーの考え方が、どのように他の第一次世界大戦を主題とした文学の戦争の描写と違っているかを示しておきたい。一般的には、第一次世界大戦に駆り出された兵士たちは、過酷な戦争の状況の中でほとんど苦痛を感じ取る感性さえ鈍らせてゆき、どちらかというと「機械」に近くなる、というのが一般的な第一次世界大戦におけるリアリスティックな兵士の状況の捉え方であった。たとえば、第一次世界大戦を描いた傑作と言われ、出版当時にはベストセラーにもなり、英語訳もベストセラーとなり、フォークナー自身も読んだとされるフランスの第一次世界大戦を描いた傑作『砲火』には、それがよく現れている。David A. Davis の論文「フォークナーの戦争小説（"Faulkner's War Stories: World War I and the Origins of Yoknapatawpha"）」では、背丈が足りないためにアメリカの空軍に入隊することができず、やむなくカナダに行ってイギリスの空軍に入隊したはいいものの、結局は兵士として訓練している間に第一次世界大戦の終戦を迎え、第一次世界大戦の戦場には行かずじまいだったフォークナーが、どのような文学作品を読んで第一次世界大戦をその想像上の世界で経験したのかを論じているが、それによると、フォークナーの初期の作品、特に『兵士の報酬』などを書く際に参考にしたのは、フランスの作家であるアンリ・バルビュス（Henri Barbusse）が書いた、『砲火』（フランス語の原題が Le Feu, 英語に翻訳された題名が Under Fire）という第一次世界大戦を主題とした反戦作品である。これは第一次世界大戦を描いたフランスの代表的小説のひとつだが、この作品を読んでみて最も目につくのは、自分たちがずっと戦場で苦痛を受けているうちに、機械のようになってしまっているという描写である。まず、兵士たちは戦場に行くのを待っている間に始終待ち続けて、待っている機械みたいになってしまう（We are waiting. Weary of sitting, we get up, our joints creaking like warping wood or old hinges. Damp rusts men as it rusts rifles; more slowly, but deeper. And we begin again, but not in the same way, to wait. In a state of war, one is always waiting. We have become waiting-machines. *Under Fire* p.17 <https://archive.org/details/underfirestoryof00barbrich/mode/2up>）そしてまた、行進するときは、行進するマシーンになってしまう。（We march like machines, our limbs invaded by a sort of petrified torpor; our joints cry aloud, and force us to make echo. *Under Fire* p. 61）そしてしまいには、あまりに苦痛を受けるので、その苦

痛をすぐに忘れるよう、忘れるマシーンになってしまう。 “That's true what he says,” remarks a man, without moving his head in its pillory of mud. “When I was on leave, I found I'd already jolly well forgotten what had happened to me before. There were some letters from me that I read over again just as if they were a book I was opening. And yet in spite of that, I've forgotten also all the pain I've had in the war. We're forgetting-machines. Men are things that think a little but chiefly forget. That's what we are.” *Under Fire* p.328）このように、アンリ・バルビュスの『砲火』という作品では、戦争では人間は自分が戦場に立つ前に思い描いていたような勇敢な英雄になることもできず、ただ塹壕の中で果てしない苦痛に耐え、とうとう人間が苦痛の果てに無感覚な機械のようになっていく、そうしなければ耐えられないような状況に追い込まれる、ということがわかる。これが、戦場における「幻滅」の典型的な表現だと言っていいだろう。

このような身体の「機械化」が、第一次世界大戦のもたらした幻滅と強く結びついていることを押さえた上で、それでは、今度はもう少し視線を拡大して、戦争を直接経験したことのない、いわゆる普通のアメリカ人たちがどのような幻滅を味わったのかをみてみよう。そうすると、ディヴィスが言うように、Paul Fussell、Modris Eksteins、Allyson Booth、Vincent Shelly などの研究者たちはこぞって「モダニズムと第一次世界大戦は全体的に繋がっていて、社会的な現代化の過程、つまり都市化、工業化、そして国家主義というものが、新たな実験的芸術、建築、文化を作り出し、戦争の結果としての資源と国家権力（の癒着と中央集権化）への反発と抵抗を経験することになった。こうして、第一次世界大戦とモダニズム芸術は現代化への第一歩となり、戦争経験はモダニズムの進展に大いに影響を与え、そこに伝統を打ち壊すような傾向(ethos)、この世代特有の精神的外傷（トラウマ)、幻滅といった要素を付け加えていった。フォークナーが小説を書き始めた時、戦争を扱うと言うことは、これらの実験的要素や、精神的外傷や、幻滅というものをひっくるめた作品を描くと言うことであり、彼の初期作品は明らかにこれらの特徴を備えている」(Davis 20)といえる。しかし一体、フォークナーを含め、第一次世界大戦を経験した人々が感じた精神的外傷や、幻滅といったものは、よく言われていることなのだが、それは具体的にはいったい何だったのか。たとえばフォークナー自身は実際に戦争に行っていないわけだから、彼自身が戦争によって直接負傷したわけでもなく、そのため直接の戦場での経験がトラウマになったと言うわけではない。むしろ、Davis も言うように、フォークナーはその作品で南部もまた「広大で世界市民的な性質を持つモダニズムの一部」であり、同時に「第一次世界大戦で最後まで残った前線の一つ」であるとの認識を示した、と言う方がその実態に近いだろう(David 21)。ここで、南部が「第一次世界大戦で最後まで残った前線の一つ」であるということが一般の人々にとってどう言うことなのかと言うと、経済的あるいは政治的に言うと、戦争にあたって国家全体の産業および政治すべての体制が戦争に動員されるという総力戦化（全体戦争化）が進み、戦争が一般市民の民兵を動員して行われる戦争となったと言うことである。それはたとえばいわゆる「銃後」をあらわす “home front” という言葉が使われる頻度にもあらわれ、google Ngram viewer を使ってみると、19 世紀後半ではまずわずかに使われてくるのが多分

1897 年くらいから、ちょうど米西戦争の前年からである。そしてこの使用頻度が急速に上がっていくのが 1914 年から、つまり第一次世界大戦が始まった年となる。ここから急速に頻度が上がって、そのピークを迎えるのが 1942 年、第二次世界大戦の真っ最中だ。これを、さきほどの南部という田舎がが「第一次世界大戦で最後まで残った前線の一つ」と言う言葉と繋げてみると、それがどう言うことかと言うと、第一次世界大戦で英雄になろうと戦場に行ったはいいが、自分の息子が戦死したり、両腕をなくして帰ってきたりする、しかもその苦悩がもちろんだけれども第一次世界大戦が終わった後でもずっと続くと言う意味である。そしてこういう「銃後」、つまり総力戦の状態は、第一次世界大戦が終わったからといって終わらずに、第二次世界大戦までずっと続いていたと言うことがこのような言葉の使用頻度からもわかる。最もわかりやすい例で言えば、自分の息子や恋人、親戚のお兄ちゃんが戦場に兵隊として参加する、そして戦死して帰ってこない。あるいは両腕が義手になって帰ってくる。実際フォークナーの『兵士の報酬』では、美しい顔をしていた恋人が顔を吹き飛ばされて二目と見ることができないような醜い顔で帰ってくる、それをみて婚約者の女性が彼と結婚するかどうか苦悩する、というのを、わかりやすい第一次世界大戦のトラウマとして描くことになる。映画の『我らが生涯の最良の年』とかにも、両腕が義手になって帰ってくる兵士が描かれるが、このような悲劇、あるいは不快な経験が幾度となく再生産され、しかもそれがアメリカの隅々まで経験され、自分の身近で起こっていると言う経験をしたのが第一次世界大戦とその後の第二次世界大戦まで続く事態であった。ではそんな経験をした第一次世界大戦の幻滅とは何かと言うと、単純に言えば、現代化して技術が発展して、国家と産業がどんどん発展していったはいいが、それは国家と産業が一体となって国民に対して延々と不快な経験を再生産して与え続けるものなんだ、と言うことをありありと理解したと言うことだと思われる。それまではそうではないと思われていた。第一次世界大戦が始まる頃には、すでに南北戦争の悲劇は風化され、むしろ南北戦争に参加した経験は「大佐」や「将軍」といった呼称とともに戦場の名誉と結びつくものとして記憶され、戦争に参加することは名誉なこと、あるいはまた、人々から称賛される快楽を得られるものと考えていたかもしれない。あるいはまた短期間で勝利が確定された米西戦争の経験から、戦争というのは局地的なもので、手早く終わらせることができるものだ幻想があったかもしれない、あるいはまたセルバンテスの『ドン・キホーテ』やラブレーの『ガルガンチュアとパンタグリュエル』 を読んでも、その主人公たちは戦闘に参加するが、その戦闘で死んだりはしないし、負傷を負うわけでもなく、むしろその戦争に参加したことによって称賛されたり、人々に暖かく迎えられたりする。だから戦争は人間の快楽の一部である、そういう幻想があったが、第一次世界大戦の全面戦争によってその幻想がほぼ全くなくなってしまった。戦争は不快なものだし、しかも社会の現代化、テクノロジーの発展は、その不快な経験の規模を拡大して再生産して、あらゆる国民に経験させるという方向にしか向かっていないということをほぼみんながわかってしまった。これが幻滅ということの意味であろうと思われる。第一次世界大戦後もずっと、南部の田舎町が最後に残った戦場として残ると言うのはどう言う意味かと言うと、そういう不快な経験というものが、目の前で息子がずっと両腕が義手のまま生活しているのを年老いた母親が見て

いる、そういう第一次世界大戦のトラウマ、不快な経験をずっと抱えて生活していくという意味であるだろう。フォークナーはもちろん、このような幻滅を前提として、第一次世界大戦から第二次世界大戦を見ていた。フォークナーは、いわば銃後の非戦闘員の人々をも含めて、19 世紀末以降の戦争は不快な体験を押し付け、しかもその不快な経験を人々に押し付けるのが、ほとんど名前さえ名付けられない得体の知れない働きであり、しかもその働きは権益を拡大していき、総力戦の名のもとにあらゆる人が現代化のシステムの中で「不快」な経験が拡大再生産されてゆくことを助長している点に注目した。そして、現代の「私たち」がつくりだしたこの名付けようのない組織を発展させてゆく総力戦のシステムが、「私たち」自身全体に不快な経験を押し付ける、つまり「私たちはもはや私たちに属していません(we no longer belong to us)」(*A Fable* 969)という、矛盾に満ちた言葉に象徴される、自分たち自身が名付けようのない不定形な働きを作り出し、そしてその不定形な働きをする組織が、そのまま不快を再生産し続ける仕組みに対して、私たちはどのように抵抗できるかをフォークナーは『寓話』で描いているように思える。

[26] 'The animal' Epicurus says, 'is inclined towards pleasure before every alteration of its nature: it is nature itself in its purity and integrity that judges within it [the animal].' (Guyau 12)

[27] In-deed, in his first "letter to Dodwell" in response to Samuel Clarke, Collins had said of animals, in language reflecting discussion of the animal syllogism, that "Experience as much convinces us, that they perceive, think, etc. as Men do. They avoid Pain and seek Pleasure, and give as good marks of Uneasiness under the one, and Satisfaction under the other, as Men do. They avoid Pain and seek Pleasure, by the same Motives that Men do, viz., by reflecting on their past Actions, and the Actions of their fellows, with the Consequences of them; which is apparent from their acting more to their advantage, the more experience they have had." (Wolfe 170)

[28] ウィーナーの『サイバネティクス——動物と機械における制御と通信』からの引用は、原文については *Cybernetics: Or, Control and Communication in the Animal and the Machine*. (Mockingbird, 2022)から引用した。和訳に関しては、引用文献に掲げている訳本を参考にさせていただいた。

[29] If therefore I do not desire to participate in the bombing or poisoning of defenseless peoples—and I most certainly do not—I must take a serious responsibility as to those to whom I disclose my scientific ideas. . . . I rejoice at the fact that my materials is not readily available, inasmuch as it gives me the opportunity to raise this serious moral issue. I do not expect to publish any future work of mine which may do damage in the hands of irresponsible militarists. (Wiener, "A Scientist" 46)

[30] "Thus, as far back as four years ago, the group of scientists about Dr. Rosenblueth and myself had already become aware of the essential unity of the set of problems centering about communication, control, and statistical mechanics, whether in the machine or in living tissue. On the other hand, we were seriously hampered by the lack of unity of the literature concerning these problems, and by the absence of any

common terminology, or even of a single name for the field. After much consideration, we have come to the conclusion that all the existing terminology has too heavy a bias to one side or another to serve the future development of the field as well as it should; and as happens so often to scientists, we have been forced to coin at least one artificial neo-Greek expression to fill the gap. We have decided to call the entire field of control and communication theory, whether in the machine or in the animal, by the name Cybernetics, which we form from the Greek χυßερνήτης or steersman. In choosing this term, we wish to recognize that the first significant paper on feedback mechanisms is an article on governors, which was published by Clerk Maxwell in 1868,3 and that governor is derived from a Latin corruption of χυßερνήτης. We also wish to refer to the fact that the steering engines of a ship are indeed one of the earliest and best-developed forms of feedback mechanisms. (Wiener, *Cybernetics* 22)

[31] The responses observed by Pavlov tend to carry a process to a successful conclusion or to avoid a catastrophe. . . . The essential thing is this: that affective tone is arranged on some sort of scale from negative "pain" to positive "pleasure" that for a considerable time, or permanently, an increase in affective tone favors all processes in the nervous system that are under way at the time and gives them a secondary power to increase affective tone; and that a decrease in affective tone tends to inhibit all processes under way at the time and gives them a secondary ability to decrease affective tone. (Wiener, *Cybernetics* 132)